

池上彰の インタビュー

vol.49



僕は、詩も言葉も 信用していない詩人です

詩人の谷川俊太郎さんは、子どものころから字を書くのが苦手で勉強が嫌い。一斉に同じことをやらされる学校も嫌いだっただけです。たぐいまれな言葉への感性は、どこから生まれたのでしょうか。詩作を始めて70年以上。91歳となった今、これまでの創作活動を振り返り、詩や言葉、日本語のありかたについて、お話をうかがいました。

このインタビューは、2023年2月20日、谷川さんのご自宅にて収録しました。

詩を書く以外、何も能がなかった

池上 国語の教科書で谷川さんの詩をご覧になっている読者も多いと思います。谷川さんはいつごろから詩を書き始めたのですか。

谷川 高校を卒業したころからです。僕は学校が嫌いで、大学に行きたくないと思っていました。みんなと同じことをさせられるのが嫌でね。当時、詩を書いている友人がいて、その詩が好きだったんです。そんな友人たちを見て、「これなら自分にもできそうだ」と思いました。宮沢賢治の詩は読んでいたし、自分もそっこのほうが向いているなという気がして、大学ノートにボチボチと詩を書き始めたんです。

池上 お父様の谷川徹三さんは哲学者で、法政大学の総長もなさっていましたよね。

谷川 父には、「大学も行かずにこれからどうするんだ」とたずねられました。私は全くインテリじゃなかったし、どちらかというとインテリに反感を持っていました。これからどうするかと聞かれても、自分でもどうしたらいいのかよくわからない。今自分が持っているのはこれだけだと思い、ノートに書いた詩を父に見せました。父は宮沢賢治の研究者で、若いころ詩を書いていたような男でした。それに親バカだったのでしよう。悪くないと思っただけで、父の知り合いで、当時、詩人として有名だった三好達治さんにそのノートを見せてくれたんです。

池上 そこで三好さんが谷川さんの詩を評価されたということですか。

谷川 僕は、それがありがたいことだともよくわからなくてね。私の最初の詩集『二十億光年の孤独』の巻頭に三好さんが詩を寄せてくださった。



撮影 吉永考宏

詩人

たにかわしゅん たろう
谷川俊太郎

1931年、東京生まれ。詩人。1952年、第一詩集『二十億光年の孤独』を刊行。多数の詩集、散文、絵本、童話、翻訳があり、脚本、作詞、写真、ビデオも手がける。1983年『日々の地図』で読売文学賞、1993年『世間知らズ』で萩原朔太郎賞、2010年『トロムソコラージュ』で鮎川信夫賞、2016年『詩に就いて』で三好達治賞など受賞多数。代表作に『六十二のソネット』『旅』『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』『はだか』『私』など。近刊に『へいわとせんそう』など。



ジャーナリスト
いけがみ あきら
池上 彰 (聞き手)

1950年、長野県生まれ。ジャーナリスト。名城大学教授。慶應義塾大学卒業後、73年、NHK入局。報道記者として勤務。94年から11年間、「週刊こどもニュース」で子どもたちにわかりやすくニュースを解説。2005年、NHKを退局。『池上彰の君と考える戦争のない未来』（理論社）、『池上彰の社会科教室』（帝国書院）など著書多数。本誌の対談を集録した『池上彰が聞いてみた「育てる人」からもらった6つのヒント』（帝国書院）も好評発売中。最近はオーストラリアの環境意識の高まりを取材。

影響を受けた詩人・童話作家 宮沢賢治

池上 そのように自然に言葉が出てきて詩が書けるなんて、私にはとてもうらやましいことです。子どもの頃から本をたくさん読んでいたのですか。

谷川 僕ね、あまり広く本を読んでいないんですよ。ドストエフスキーもトルストイもチェーホフも、夏目漱石すら読んでいなかった。本よりもずっとラジオが好きで、ラジオを夢中で組み立てていた。鉱石ラジオから始まって、真空管ラジオを使うようになり、海外の短波を聞きたくまりました。オーストラリアやアメリカの放送が入るとすぐうれしくてね。言葉が違うのを楽しみむだけで、意味は全くわからないのですが。コールサインや放送局の雑音が聞こえると、「聞こえた、聞こえた」と喜んでいました。いい詩が書けたときよりずっと感激しましたね。

池上 いい詩が書けたときよりですか（笑）。ラジオで英語を勉強したということでもないんですね。

谷川 ラジオの内容はどうでもよかったし、僕は勉強が嫌いなんです。家にはうんざりするほど本があらんでいて、父の本棚にモーパッサンの『脂肪の塊』という本がありました。「ちょっと官能的だな」と思って読むことはありません。寝床でこっそり読んでいたら母親に取り上げられました。そんな読み方しかしていません。

池上 ハハハ。でもあとから考えたら小学生のときにモーパッサンを読んでいたわけでしょう。

谷川 一応一冊だけね。あとは、父が研究していた宮沢賢治の本がたくさんあって、それはずいぶん読みました。詩よりも童話が好きで、宮沢賢治からは

池上 それは強い味方がいましたね。世間は谷川さんのことを、「三好さんが評価している詩人」と受け止めますよね。

谷川 そうですね。だから、詩人として恵まれたスタートだったと言われています。でも、詩集なんて売れませんか、詩で生活はできません。母には心配して泣かれましたし、私にとっても、どうやって食べていくかということは大問題でした。詩を書く以外、ほかには何も能がありませんでした。

仕方がないから自分でできる仕事は何でも引き受けました。一九六四年の東京オリピックの記録映画の脚本や、ラジオドラマなどを書いて食いつないでいました。

池上 しかし、よく仕事の依頼が来ましたね。

谷川 本当にそう思います。僕は「締め切りの一か月前には納品する」ということで有名なのですが、締め切りを守ってビジネスライクに仕事を受けていたんだと思います。

池上 それにしても、友人が詩を書いていたのを見ただけで、誰もが詩人になれるわけではありません。谷川さんは、詩を書き始める前から、詩や言葉に対する造詣や特別な思いがあったのでしょうか。

谷川 なかったと思いますよ。書き始めてからも、深刻なことは何も考えず、ただ何となく出てくるおもしろい言葉を書き留めていた。詩について考えるようになったのも、言葉について考えるようになったのも、ずいぶん後のことですね。

詩は現実を抽象的な言葉で表現したもの。 言葉と言葉のつながりが詩になる瞬間をつかむ。



味があるのですか。

谷川 意味はないんです。彼の独創でしょう。宮沢賢治は既成の言葉にこだわらないところがあります。僕もわりと既成の言葉にこだわらないで詩を書こうと思っていました。

池上 谷川さんの詩はそういうところも非常に新鮮で、評価されたのでしょうか。

谷川 最初の詩集が『二十億光年の孤独』なのですが、孤独というと多くの人は人間間の孤独を考えるでしょう。だけど僕はひとりっ子で母親に愛されていたので、一人で遊んでいても人間関係の孤独は感じていませんでした。孤独といえば宇宙のなかの孤独だとはじめから思っていた。ですから自分にとって「二十億光年の孤独」はリアルな言葉なのです。みなさんには新鮮に聞こえたのかもしれませんが、池上 当時は宇宙が二十億光年くらいの広さだとされていきましたね。今、宇宙は一三八億光年だといわれています。

現実から詩が生まれる

谷川 あの頃と比べると、宇宙の広さはずいぶん膨大になってきました。最近言葉もずいぶん抽象的になってきていると感じます。自分の身の丈に合わない、頭のなかでしかイメージできない言葉が増えてきました。

例えば、戦争の報道もそうです。僕には、第二次

世界大戦の頃の具体的な戦争体験があります。B29の空襲で焼夷弾が落ちたことや、翌朝に友だちと自転車で見に行くと焼死体がゴロゴロしていたこともあります。しかし今では、みなさんはそういう具体的な体験はないわけでしょう。知識としては以前よりもたくさんあるけれど、言葉が実感をとまわらないことが多いです。言葉を聞いても、もうひとつピンとこないことが多いですね。

池上 確かに戦争の報道は抽象的ですね。日本ではテレビ局がとにかく死体を映さないようにしています。東日本大震災があつたときも、日本の国内では津波の被害者の映像は出ていませんが、海外のテレビでは映っていました。

谷川 そうした現実が抽象的に表現される習慣は、詩を書いている人間にとっては「リアルなものがない」という感じがします。詩は抽象的な言葉で書きますが、現実が基になっているものから。

池上 つまり、極めて現実的なものを、詩という形で抽象的なものに昇華させるわけですね。そのプロセスはどのようになっていくのでしょうか。

谷川 それは脳科学者に聞かないとわかりませんね。ただ、最初にイメージするものが具体的なものでも、一種の観念のようなものでも、言葉は次々と連想を生むでしょう。その面白い連想を書き留めることが最初のプロセスとしてあるようです。

その言葉と言葉の組み合わせが、あるときポエジーという、普通の散文とは少し違う言葉のつながりを生むことがある。その瞬間をつかむことがいちばん大事です。どこから詩になるのかはとても微妙で、人によっても、経験によっても変わっていくものなのですが、「これで詩になっている」「これは詩じゃ

かなり影響を受けていると思います。『北守将軍と三人兄弟の医者』は、『グスコープドリの伝記』ほどには有名ではない作品ですが、好きでした。
池上 私は『グスコープドリの伝記』に感激しました。あれは今でいう「温暖化」についてのお話ですよ。火山を噴火させて二酸化炭素を増やせば寒冷地が暖かくなる——と。よくそんな知識があつたなあと思ったものです。
谷川 彼は農業関係の知識をかなり勉強していますね。僕は、宮沢賢治の言葉の使い方が好きなんです。今でもよく覚えているのは、『蛙のゴム靴』という作品で、カエルたちが雲見をする場面です。「どうも実に立派だね。だんだんペネタ形になるね。」と、カエルが平たい雲を見て言うんです。
池上 初めて聞きました。「ペネタ形」とは何か意

ない」というその判断が勝負どころだと思えます。池上 谷川さんは、長年、言葉の世界で仕事をしてこられました。最近の「言葉」について何かお考えになつてゐることはありますか。

谷川 とにかく量が多すぎますね。世界全体がもっと無口になつてほしい。

池上 インターネットやSNSも含めて、饒舌すぎるということですか。

谷川 そうですね。言う必要のないことを言っている人がたくさんいるような気がします。でもそれが商売になつてゐるのだから、一概に否定はできませんけれど。古い人の詩を読むと、現代人に比べると本当に言葉が少ない。それは意識的に減らしてゐるのではなく、自然に少ない言葉が出てきて詩になつてゐる。先日、井伏鱒二さんの詩を読み直しましたが、現代詩の言葉と出どころが違うんです。言葉が人間全体から出ているというか、現実の肌触りに正確に結びついています。

池上 昔の詩はそんなに饒舌ではなかったということとは、一つひとつの言葉や文字を大切にしていたということなのでしょう。

谷川 それはもちろんありますが、人格の問題かもしれません。詩を書く人の人格、人となり。生活のなかで無駄なおしゃべりをしないことも含めての人格です。この辺りのことを伝えるのは難しいですね。僕は詩を書き始めたころから、あまり言葉というものを信用してゐなかつたんです。今もって信用してゐないんですけれどもね。

池上 言葉信用してゐない。

谷川 はい。そして、言葉よりも詩をもっと信用してゐませんでした。信用してゐないから、詩を書い

言葉を信用してゐないからこそ、

詩を書き続けることができた。

ても、書いても、「こうでもない、こうでもない。もっと自分の感じてゐる真実があるはずだ」と、詩を書き続けてこられました。子どものころから、言葉というのはその人間にぴったりついておらず、浮いてゐるという感覚を持つてゐました。

池上 それはつまり、自分の気持ちを言葉でうまく表せないということですか。

谷川 というより、人に不快感を与えずに自分の気持ちを伝えるためには、どこかに嘘が混じつてしまふという感覚です。嘘が混じつてゐることが言葉による創作なのかもしれません。それがどうしても気になつてしまふんです。だから、嘘が混じつてゐない言葉が自分から出てくるとすごくうれしい。そんな言葉はなかなか出てこないのですが。

池上 そうすると、谷川さんがよくできたと思える詩は、嘘が混じつてゐないということですか。

谷川 全部嘘が混じつてゐるからよくできてゐる(笑)。

池上 なるほど、だからみなさんに受け入れられる。

谷川 簡単に言うとうそです。

池上 嘘がないと受け入れられないのでしょうか。

谷川 どうでしょうね。僕の詩集に、いろんなものを定義した『定義』という詩集があります。本来、定義には嘘の入りがないわけですが、詩集として評判にはなりません。いや、詩集として変わつてゐるという意味で評判になつたのかな。

たとえばリンゴなら、色はきれいだし、おいしそ

うだし、においはいいし、切つたらもちろん食べられる。そんなふうに表示することはできますが、リンゴ全体を言葉で表そうとしても言い切れない。それをどうにかうまく面白く言語化しようとした詩集が『定義』です。数学の定義とは全く違つて、結局「そのもの」からずれていきましたね。「いくら言葉で言つても言いきれない」と定義するしかありませんでした。

池上 何かを表現したいとき、言えば言うほど本質からずれてしまふというもどかしさは、確かにあります。

日本語の未来

谷川 日本語はわりと情緒的な言語で、論理的な側面が薄い。道順ひとつも文章で正確に書くのは難しい。言葉にはどうしてもいかさまが混じつていくということが本質的にある、と思つてゐます。

池上 私は記者時代、ものごとをわかりやすく人に伝える訓練のひとつとして、駅から自宅までの道順を人にどう説明したらいいかを頭のなかで組み立ててゐました。

谷川 それは、僕と完全に同じ発想ですね。

池上 たとえば渋谷駅からだと、「渋谷駅のハチ公口を出ると目の前が広場になつていて、そこに忠犬ハチ公の像がある。その先に行く道路が3つに分かれていて……」などと練習しました。その場所

を見たことのない人の頭のなかに絵が浮かぶように説明をするには、どのように表現すればよいのかと考えていました。

谷川 それが本当に大変なんですよ。今はもうスマホで検索して一目瞭然ですから、そういう言語教育は成り立たなくなりましたね。

池上 よく「最近の若い人の言葉は乱れている」と言われることがあります。谷川さんは乱れていると思いますか。

谷川 言葉はもともと乱れるものだと思っているので、あまり気になりません。乱れた言葉が新鮮な場合もある。そういうときはその言葉を使いますね。

池上 確かに、たとえば「うれしい悲鳴」などは、今だと手垢のついた表現ですが、最初に使った人は新鮮に感じたでしょうね。

谷川 その人は詩人だったんじゃないの？

池上 そうかもしれません。初めて聞く言葉は真新しいからよく使われるようになり、そして手垢がついていく。そう考えると、詩作というのは手垢のついていない新鮮な言葉を何とか探さないと作業でもありませんね。

谷川 そうですね。ただ僕も、つい惰性で手垢のついた言葉を使ってしまう。するとその表現がとても気になって、書き直したくなりますね。

池上 今後、日本語の未来はどうなると思いますか。
谷川 それは、世界の未来が今後どうなるかに関わってくるから簡単に言えません。一時期は、国語の教科書に宮沢賢治などの近代詩が載っていました。最近では近代詩が載らなくなってきたのではないのでしょうか。若い頃は特に気になりませんでした。年を取ると、日本の昔の言葉は知っていた

説明すると詩そのものが死んでしまう。 散文に戻ってしまおうんです。

ほうがいいと思うようになった。古典はやはり大事だとしみじみ思うようになりましたね。今の国語教育は古典をダイジェストで教えるだけじゃないかな。

池上 その傾向はあるでしょうね。漢文の掲載は少しずつ減ってきています。

谷川 漢文脈というのは日本語の背骨のひとつなんですけれどね。

池上 2022年度から高校の国語に「論理国語」と「文学国語」という科目が設定されました。「論理国語」では実社会において必要となる、論理的に書いたり批判的に読んだりする力の育成、「文学国語」では深く共感したり豊かに想像したりして、書いたり読んだりする力の育成が重視されています。このことについてさまざまに論争も起こっています。谷川さんはどうお考えですか。

谷川 先ほどもお話したように、駅から自分の家までの道順を正確に書くということも言葉の大切な要素のひとつです。それが少ないがしろになってしまふのが日本語です。日本語には論理的ではない部分があるので、国語の教科書はまず日本語の論理的な構造を取り上げ、その後で詩歌を取り上げるといいと思います。

池上 意外です。てっきり谷川さんは逆の考えだと思ひ込んでいました。

「好きか嫌いか」から始める

池上 谷川さんは、小学校などを訪問して詩の朗読もされてきましたね。子どもたちに直接朗読を聞かせたいなどの思いがあったのでしょうか。

谷川 依頼があつて始めたことですが、やはり僕は読者や詩の聞き手の反応がとても気になりますね。つまらないと思ったら「つまらない」と言つてほしいし、面白いと思えば笑つてほしい。詩を書くときも、必ず読者とのコミュニケーションを考えています。

池上 子どもは正直に反応してくれますよね。

谷川 今は詩の朗読などは息子（谷川賢作氏）に任せています。息子は詩の朗読がうまくなりました。

池上 息子さんは音楽家ですね。

谷川 はい。朗読には、詩を読むときの間やリズムがあるでしょう。その感覚が僕に似ています。

池上 子どもたちは、オノマトペの多い詩を喜ぶでしょう。

谷川 言葉には音楽的な要素があるということ子どもたちは本能的に知っているんじゃないかな。子どもの遊びには、昔からそういう要素がたくさん入っていますから。

池上 谷川さんご自身も音楽がずっとお好きだったと聞いています。音楽やリズムと詩というのは深く関係しているのでしょうか。

詩を書くことは生きがい。

いつの間にか、いちばんの楽しみに。

谷川 よく「言葉のリズム」などと言いますが、僕はリズムではなく「言葉の調べ」と言っています。

これは、言葉の持つ音楽性のことです。短歌の五七五も調べのひとつですし、短歌は、意味よりも調べが重要なところがあります。

池上 最近、俳句もブームですが、俳句は文字が少なく、その上に季語を入れなくてはならないなど非常に制約があります。あえて言葉で細かく説明しなくても状況を思い起こさせるところは、詩と共通しているような気がします。

谷川 日本では俳句や短歌なども含めて詩歌といいますが、詩と歌は定型であるかないかの違いだけで、本当に親戚のようなものだと思います。「行間

に何かがある」という感覚を生むのが詩ですから。

池上 今は「行間を読み」ではなく、行間を埋めるようなわかりやすい説明が求められますね。

谷川 先ほども教科書の話がありました、実は教科書に詩が載ることも、僕はあんまり賛成ではありません。詩歌は本を買って読めばいい。

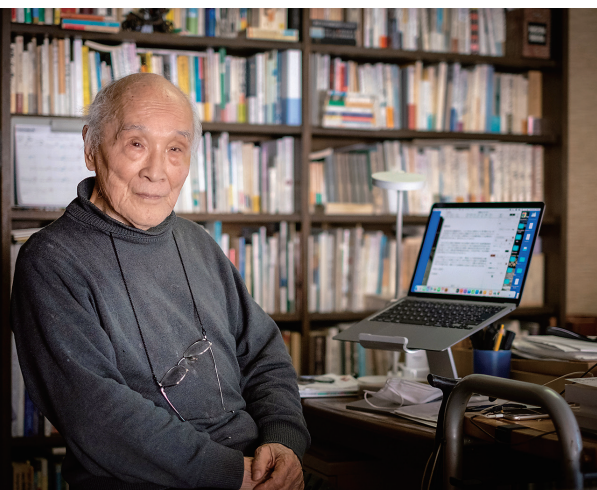
池上 しかし、今も国語の教科書には谷川さんの詩が掲載されています。教科書のはじめのほうに詩が載っていることが多いですね。

谷川 僕の詩が教科書に載っても、綿々とそれを説明する先生がいると、詩そのものが死んでしまう。散文に戻ってしまうんです。だから僕は、学校などで「この詩で何を言いたかったのですか」と先生にたずねられると、「原稿料がいくらか考えていました」と言ってはぐらかしていました。

池上 では国語の授業ではどのように詩を読み進めるとよいのでしょうか。

谷川 まず先生は、何も説明せずに子どもたちに詩を読ませてみてほしいですね。僕なら、「第一印象でこの詩が好きか嫌いか」というところから始めます。その好き嫌いについて、どこがなぜ好きなのか、あるいは嫌いなのかと子どもたち一人ひとりが考えていくと、だんだん詩のなかに入っていきけるような気がします。

池上 そのようなやり方が感性を育てていくということにつながるのでしょうか。



いつも創作活動をしている自宅の仕事部屋にて。父 徹三氏が使っていた客間を書斎にしている。執筆・推敲ともにパソコンの画面上で行うという。



対談を振り返って

谷川 そう思います。同じ言葉でも、みんな感じ方が違いますから。

池上 朗読は息子さんに任されているということですが、詩を作るといふ仕事は、今も変わらずされていますよね。

谷川 今ではもう、仕事というより、生きがいです。詩を書くことで外界とつながっています。昔は車が好きで、よく車を運転して出かけていましたが、足が不自由になり、運転することもなくなりました。旅行にも出られないからつまらない。だから僕の作品の感想を聞くと、外界とつながっていることが感じられてとてもうれいんです。仕事として詩を書き続けていたら、いつの間にか、詩がいちばんの楽しみになっちゃいましたね。

対談編集／太田美由紀、天然社

谷川さんの詩人としてのデビューの経緯は驚きでした。これはきつと谷川さん流の諧謔の籠ったお返事だと思います。ただ、言葉をうまく操れないときの焦燥感は身につまされます。

でも、「最近の若者の言葉は乱れている」とおっしゃるのではなく、「乱れた言葉が新鮮な場合もある」とのお答えは、常に新しい言葉を開拓しようとしていくからこそその感想でしょう。言葉を使うことを商売にしている私たちは、そんな発想や感性を持っているのでしょうか。